

LUI「公募研究」成果報告書

研究課題（和文）：動くアジアと共生の倫理

研究課題（英文）：Moving Asia and the Ethics of Commensalism

申請者名・所属先：池亀 彩・情報学環、東洋文化研究所（兼）

海外招聘者名：Crispin Nicholas Bates (The University of Edinburgh)

1. 研究の目的

本研究では、これまでの移民研究を批判的に継承する形で、「自由意志を持つ個人」と「国民国家」という近代的な枠組みで捉えられがちであった移民研究に対し、新たな視点を提出することを目指す。特に、これまで否定的に捉えられて来た「仲介人」・「媒介人」や、個人の損得を超えた「親族関係 kinship」・「感情 affect」・「宗教的紐帯」などを積極的に評価していく。また日本国内で行われている様々な研究を国際的に発信し東京大学の学術的プレゼンスをさらに高めること、地域ごとに別々に発展して来た日本におけるアジア地域研究を横断的に接続し、東京大学をアジア研究の国際的なハブとして確立することを目指している。共同研究者として英国エディンバラ大学よりベイツ教授を招聘する。

2. 研究開始当初の背景

近年、人の移動が一層顕著になり、またグローバルな形で広がっていく中で、移民排斥や難民問題、新しい形のナショナリズムが注目を浴びている。この状況のもとで、移動をどう理解し、また共生のための倫理をどう構築していくかという問いは、現代社会を生きる我々にとって喫緊の課題である。

3. 研究の方法

共同研究者のベイツ教授は、インド系移民史の大家として国際的に著名なだけでなく、これまでに大規模な研究プロジェクトを成功して来た経験がある。さらに国際的な学術出版に関して類を見ない知見を有しており、多くの編著（14冊）を持つ。また日本における南アジア研究を英語で国際発信するために英国ラウトレッジ社から Routledge New Horizons in South Asian

Studies というブックシリーズを監修し、すでに4冊刊行されている。今回は、東アジア地域を中心とした新たなブックシリーズ HMC New Horizons in Asian Studies を刊行する。また英語での出版に不慣れであるような国内の研究者のために翻訳や校正、出版社とのやりとりなどを補佐する。

具体的には次のような研究活動を行う。

1. 国際シンポジウム Crossing Boundaries: Migration, Mediation, Morality の開催（東京大学伊藤国際学術研究センター会議の助成内定）の開催。人の移動を中心テーマとして、文理融合、地域横断的な複数の専門分野（歴史学、社会学、文化・社会人類学、地域研究、国際法、国際政治学、人類生物学・遺伝学）の研究者を国内外から招聘する。
2. 国際シンポジウムで発表された論文、さらに科研費の研究プロジェクト「現代インドにおけるポスト開発：媒介と協同性のポリティクス」での成果を中心に、新しいブックシリーズから編著を準備する。
3. シンポジウムでの議論を発展させながら、東大ヒューマニティーズセンターでの定期セミナーを開催する。

4. 研究成果等

第6回HMCオープンセミナー

- 題目：北インド系海外労働移民 1857-1869年：要因・仲介人・信頼の役割
- 日時：2019年1月11日（金）17:00-19:00
- 場所：東京大学 東洋文化研究所3階 第1会議室
- 報告者：Crispin Bates（東洋文化研究所・特任教授）
- コーディネーター：池亀彩（情報学環・准教授）
- 使用言語：英語（一部、日本語）
- 概要：1857年のインド大反乱以降、海外へ渡るインド人の数はこれまでにないほど増加する。今回の発表では、インド大反乱とインド人移民の増加との間の密接な関連を 1857年から1869年の間にカルカッタ港を出港した4600人の移民記録を分析することから明らかにする。北インドにおける「プッシュ」要因と海外での雇用者側の需要という「プル」要因だけでは、この関連を完全に説明することはできない。インド人はインフォーマルなネットワークと感情的な関係性に依存する

ことで、植民地政府によって作られた搾取的な状況に対抗した。ここでは様々な種類の「仲介者 (intermediaries)」たちが重要な役割を果たした。現代の政治的言説においては、トラフィッカー (人身売買人) と、そして植民地時代にはシルダール (sirdars) やカンガーニ (kanganies) と侮蔑的に呼ばれた彼らは、移民たちがインド洋やカリブ海の特定の目的地へ移動する旅程において様々な手助けを行なった。こうした仲介者は、彼ら自身が元々は移民であるケースが多かったため、難民や移民たちに長旅の危険をどう避けるか情報を与えることができた。彼らはまた海外のプランテーションでの監督者でもあった。雇用主と雇用者の仲介役として、彼らはしばしば批判の対象ともなったが、彼らは、モーリシャス、南アフリカ、マレーシア、トリニダード、ガイアナなど本国から遠く離れた土地において、労働者たちが再雇用を望んだり、定住を決めたりする際に、彼らの利益を代弁する極めて重大な役割を担っていた。何十万人もの北インド出身者たちが、こうして海外の土地に定住していったのである。その結果インド人は、少なくともヨーロッパ人と同様かそれ以上に、19世紀・20世紀初頭のグローバル・サウスにおける新しい社会の出現に貢献したのである。

第12回 HMC オープンセミナー

- 題目：歴史をクィア化する：監視される植民地期南アジア系海外移民の親密性
- 日時：2019年6月21日(金) 17:00 - 19:00
- 場所：東京大学 伊藤国際学術研究センター3階中教室
- 報告者：Crispin Bates (東洋文化研究所・特任教授)
- コーディネーター：池亀彩 (情報学環・准教授)
- 使用言語：英語 (一部、日本語)
- 概要：19-20世紀の南アジア系移民の歴史を脱植民地化するには、まずナショナリストと植民地主義者との間の対立する歴史解釈という図式に挑戦することから始めなければならない。さらにインド人ディアスポラに関する記述が前提としている異性愛規範にもまた挑戦しなければならない。南アジア系移民労働者たちは、様々な人種やジェンダーに属するパートナーを選択するというエージェンシーを行使したが、そうした行為ゆえにしばしば不道德な存在であるとみなされた。これゆえに労働移民 (特に年季契約労働移民) た

ちは墮落していて、改善されるべき対象だと性格づけられたのだ。これに呼応して、植民地政府は、悪名高いインド刑法第377条や「誘惑」を禁止する様々な法によって、移民たちとの親密な関係を規制し、異性間の婚姻のみを承認し、異人種間の通婚を妨げ、同性間の性的関係を罰するようになった。しかしながら、このような努力はそれほど効果的ではなかった。なぜなら、南アジア系移民たちとの社会的・情緒的な関係性は混乱するほど多様であったし、植民地の役人たちは (セクシャリティの) 差異を認識できるほど優秀でもなく、またそもそも植民地統治は表面的なものであったからである。この発表では、1850年代から1930年代のマレー半島などからの事例を用いて、こうした移民の間における性と管理の問題を議論する。

国際シンポジウムの開催

- 題目：Crossing Boundaries: Migration, Mediation, Morality
- 日時：2019年6月8-10日
- 場所：東京大学 伊藤国際学術研究センターおよび東洋文化研究所
- 主催：伊藤国際会議、東洋文化研究所、ASNET、インド・南アジア地域研究東京大学拠点など
- コーディネーター：池亀彩 (情報学環・准教授)・後藤絵美 (東洋文化研究所・准教授)、Crispin Bates (東洋文化研究所・特任教授)
- 使用言語：英語
- 概要：人の移動を中心テーマとして、文理融合、地域横断的な複数の専門分野 (歴史学、社会学、文化・社会人類学、地域研究、国際法、国際政治学、人類生物学・遺伝学) の研究者を国内外から招聘し、「奴隷」についての再考察、「ホーム」の想像、つながりとアフェクト、環境適応など、これまでの移民研究では取り上げられてこなかった新しいテーマで活発な議論が行われた。

国際ワークショップの開催

- 題目：Rethinking Development: Networks, Brokers and Devotion
- 日時：2019年3月29日
- 場所：国立シンガポール大学
- 主催：国立シンガポール大学南アジア研究プログラム&科研プロジェクト「現代インドにおけるポ

スト開発」(研究代表：池亀彩)

- 使用言語：英語
- 概要：これまでのトップダウン型の開発モデルにおさまらない様々な形の開発をポスト開発と捉え、宗教や様々な媒介者の役割を問い直すワークショップで科研プロジェクトの研究分担者たちが3年間の研究の成果を発表した他、国立シンガポール大学側からも研究発表があり、有意義な意見交換が行われた。

‘Becoming “Coolies”’: Re-thinking the origin of Indian Ocean Labour Migration in the Colonial Era’

- Aya Ikegame ‘Devotion and Slavery: submissive agency and development in modern India’

[その他]

新たなブックシリーズの発足。

- Cambridge University Press より Global South Asians というブックシリーズが発足し、Crispin Bates がシリーズエディターに就任した。伊藤国際会議での論文や、HMC での研究成果はこのブックシリーズから図書として刊行される予定である。

5. 主な発表論文等

[図書]

- Aya Ikegame 2019 ‘The Guru as Legislator: religious leadership and informal legal space in rural South India’, in D. Gilmartin, P. Price, A.E. Ruud (eds.), *South Asian Sovereignty: The Conundrum of Worldly Power*, New Delhi: Routledge, 58-77.
- 池亀 彩 2019 「飲むべきか飲まぬべきかーベンガルルール市でのフィールドワークから」井坂・山根編『食から描くインドー近現代の社会変容とアイデンティティ』春風社、pp. 303-341.

[雑誌論文]

[学会発表]

- ‘Guru Governance: Devotional Citizenship and Rural Development in Southern India’ at the International Workshop ‘Rethinking Development: Networks, Brokers and Devotion’, organized by South Asian Studies Programme, National University of Singapore & JSPS Project 「現代インドにおけるポスト開発」(基盤 B 16H05659), 29th March 2019.
- 国際会議 Crossing Boundaries: Migration, Mediation, Morality (2019/06/8-10)での発表：Crispin Bates ‘North Indian Overseas Labour Migrants in the Colonial Era: Networks, Intermediaries and Trust’ &